

ターのHPでの史料検索で、何点かの航空毒ガス戦関係のものを発見しました。それらの史料をもとに、静岡県近代史研究会の会誌第二八号に「浜松陸軍飛行学校と航空毒ガス戦」を記しました(二〇〇二年)。

二〇〇三年に、神栖での遺棄毒ガスが問題となるなか、かつて浜名湖へと投棄された毒ガスも問題視され、静岡放送が浜名湖への投棄毒ガス問題の取材を始めました。その後、番組は二〇〇三年十一月に「アクセス静岡土曜スコープ」で『浜名湖の毒ガスはどこへ? 旧日本軍処理の真相は』と題して放映されました。

この番組は、浜松の基地周辺での遺棄毒ガス発見現場、毒ガス部隊疎開地、遺棄毒ガス被害者家族、三方原教導飛行団関係者などへの取材を含むものであり、遺棄毒ガスをテーマとしたものでした。そのため、浜松での毒ガス兵器の開発・研究の実態やそれを経ての中国での演習や実戦での使用については踏み込んでいません。

日本軍の遺棄毒ガス問題については、その処理のみならず、戦争犯罪である実戦での使用状況について明らかにされるべきです。浜松の関連でいえば、航空毒ガス戦についての説明が求められているといえます。

四 浜松駅周辺

1 新町 夢告地蔵

浜松駅の北東の新町に夢告地蔵があります。この地蔵は一九四五年四月の米軍の爆撃によって破壊して倒れ、のちに再建されたものです。

もともとこの地蔵はコレラによって死亡した人々を追悼して一八五八年に建てられ、「延命地蔵」と呼ばれました。しかし一八七四年に火災にあい、さらに廃仏毀釈の動きのなかで取り壊されることになり、地中に埋められてしまいました。

一九一九年、地蔵が地上に出たいと夢に現れたことをきっかけに掘り出しが始められました。地蔵は三日後に掘り出され、「夢告地蔵」と呼ばれるようになりました。この地蔵は当時性の奴隷とされていた女性たちにも信仰され、多くの女性が参拝したといえます。

一九四五年四月三〇日の米軍の爆撃により、神明宮本殿が直撃弾を受け庚申堂・稲荷宮なども木つ端微塵に飛散しました。地蔵の頭部は吹き飛ばされ、体は傷だらけになりました。さらに七月一九日には艦砲射撃にあいま

政府自身が、毒ガスの実戦での使用について明らかにすべきです。毒ガスの使用については隠蔽し、遺棄物の処理のみをおこなうことは誠実ではありません。毒ガスについては、製造・開発・研究・訓練・実戦使用・遺棄の総体について解明されるべきですし、その解明の中心とすべきはその使用状況です。毒ガスの使用によって多くの民衆が死を強いられ、後遺症に悩まされています。実戦使用の解明について、誠意をもって対応することによって、国際的な信頼が得られるといえるでしょう。

航空毒ガス戦については中国の宜昌(イーチャン)での使用が明らかにされています。ここでは包囲された日本軍を救出する作戦として航空機でも毒ガス弾が使用されています。この戦闘での使用について、現地調査を含めて、被害実態・使用状況の解明をおこなうことができればと思います。

した。艦砲射撃の際には、吹き飛ばされた呉服店の倉にあった布地が、焼け残った柳の枯れ枝に十色以上引つかかっていたといえます。

戦後、堂は復元され、一九五二年に現在の場所に置かれました。一九七六年には堂が新築されました。

地蔵の左脇には、壊れた小さな地蔵が数体分あります。爆撃で破損したとみられる延命地蔵の由来碑もあります。庚申堂の碑(一九八六年)には一九四五年四月三〇日の空襲被爆のことが記されています。一九二〇年の玉垣、大正期(一九一九年)と天保期の灯籠、なども空爆の炎をくぐりぬけて今もあります。

地蔵菩薩とは、釈迦の死後、弥勒菩薩が出現するまでの間、衆生を救済する菩薩をいいます。もともと地蔵とは大地を意味し、その名の由来には、大地が生物を慈しむという徳性が込められています。地蔵信仰は、地獄の苦しみまでも救済するものとして民衆に広まり、道祖神信仰とも結合していきました。

この史跡から、平和な社会と文化の形成にむけての夢を読み込んでいくこともできるように思います。地域の民衆による戦争のない社会と平和的自治の実現は夢のひ

とつです。

2 被爆プラタナス 浜松市民の木（JR浜松駅前）

浜松市は一九六四年に、空爆のなかで生き残ったプラタナスを「市民の木」と命名しました。プラタナスは一九二九年に四六本が植えられました。それは一九三〇年の天皇裕仁の来浜と三一年の全国産業博覧会を控えての植樹でした。天皇が通つたことから道は「御幸通り」とよばれました。一九四五年の米軍による空爆で生き残ったプラタナスは三本でした。

最初に市民の木とされたプラタナスは一九六七年に川道から新川公園に移植され、一九八一年に緑化推進センターに移植されました。一時は枯死寸前でしたが、再生しました。いま浜松駅前にある木も空爆の中で生き残った木であり、もう一本は浜松城公園にあります。

プラタナスは再生力の強い木です。プラタナスの樹皮は毎年はがれ落ちます。木は友情と慈愛を示し生命力を象徴します。それは平和的精神を示すものともいえます。時折、この木の前で市民団体が反戦平和を訴える行動をおこなっています。

した。この建物は開発がすすむ中で残されているものであり、産業遺跡であるとともに戦争史跡です。

六月十八日の大空襲のあとには、この建物のコンクリートの上に、頭髪を乱し血みどろになった裸の女性の死体が鯉か鯖のように放置されていたといっています。

5 田町 遠江分霊稲荷神社の玉垣

この神社の玉垣は空襲で崩れたものを組みなおしたものです。木々は市が保存樹林としています。江戸末期、万延のころの灯笼なども残っています。

6 池町 芳蔭寺

この寺には空爆で破壊された大淵真龍の顕彰碑の台座が残っています。台座は寺の玄関先右側にあります。寺の住職であった大淵真龍は一九三七年に死去しましたが、その年に顕彰碑が立てられました。しかし、空爆で碑は破壊されました。碑の拓本が寺に残されています。

7 有楽街 黒田稲荷神社

この神社は五穀豊穡・商売繁盛・家内安全を願って、

3 JR浜松駅・広小路

浜松地域へは三〇回ほどの空襲がありました。国鉄の浜松駅は空爆の目標となりました。一九四五年七月二九日夜の艦砲射撃では駅前の防空壕が直撃され、一度に五〇人ほどが死亡することもありました。

近くの寺に引き取り手のない炭まみれの死体が並べられていたといっています。駅周辺にはたくさんの爆弾が投下され、現在も工事中に不発弾が発見されることがあります。

広小路には焼けた死体が何体も並べられ、遺族との対面をしました。体がばらばらにされたもの、首・手・足がもがれたもの、真っ黒こげになったものなど悲惨な場面であつたといっています。

4 広小路 静岡銀行浜松支店の建物

この建築は一九二八年に遠州銀行の本店として建てられたものです。四三年に静岡銀行へと統合され、浜松支店となりました。空爆によって菅原、伝馬、高町、名残、山下、板屋などの支店は焼失しましたが、この建物は残りました。この建物の地下に逃げ込んだ人々は助かりま

鍛冶町の人々によって江戸期につくられました。幕府の崩壊後も人々によって維持されてきましたが、一九四五年の戦火で荒廃しました。戦後、鍛冶町の六丁目有志が有楽街の入り口に神社を復元し建立しました。

8 肴町 大安寺

一六六三年創建の大安寺も戦火で焼け落ちました。「浜松手引 観世音堂 二番霊場 延明地藏大菩薩」と刻まれた一九一七年の碑が残っています。

戦争の継続と米軍による無差別空爆は浜松市街地を焼け野原にしました。この再建された大安寺に立ち、空襲で焼けた街の姿を追想することもできます。

9 五社神社諏訪神社の被爆跡

諏訪神社の創建は坂上田村麻呂の東方侵攻の際からとされています。五社神社は曳馬城内で創建され、その後この地に建設されたといっています。一九四四年には国室建築とされました。しかし、一九四五年の戦火により、両神社は焼け落ちました。一九六〇年に両者が合祀される形で再建されています。



新開 香樹ラタナス



新開 香樹ラタナス



新開銀行



新開公園 香樹ラタナス



新開 香樹ラタナス



新開 香樹ラタナス



新開 香樹ラタナス



新開 香樹ラタナス



新開 香樹ラタナス



新開公園 香樹ラタナス



新開 香樹ラタナス



新開 香樹ラタナス

新開 香樹ラタナス

神社の入口に賀茂真淵が森陣昌を顕彰して建てた「光海靈神」の碑があります。この碑の上部は一九四五年六月一八日の空襲で破損しています。神社の周辺を囲う土垣一部も戦火を越えて今に至っています。

国家神道の体制の下で神道は戦争を支える役割を果たしました。神道が過去の戦争を正当化し天皇を崇拜したことを自省し、そのような思考から離別することが、神道自身の責任のとり方であり、未来に向かつての姿ではないかと思っています。

10 五社公園 戊辰戦争記念碑

五社公園に「戊辰の役報國隊記念碑」という碑があります。この碑は日露戦争後の一九〇七年に建てられました。戦争に参加した八八八、隊員六〇人などの名を刻んでいます。戊辰戦争は江戸幕府を倒し、近代天皇制を確立することになった戦争でした。

その後の天皇制のいつそうの強化と日露戦争などの戦争の拡大の中で、好戦的な動きを強めるためにこの碑がつくられていったとみることができます。

「東海有数ノ工業都市」となったとし、産業を振興し人心を和していくことで「洪恩ニ奉答」することなどと記されています。

天皇を神聖不可侵なものとする時代において、いかに行政が国家に隷従していたのかがこの碑文からわかります。このように天皇に隷従し軍備を拡張して海外侵略をすすめますが、結局浜松市民から一万人を超える戦争死者と戦災死者をだすことになり、大地と社会は荒廃しました。

13 鍛冶町 金山神社の再建

江戸幕府崩壊後、現在のところに神社が移されています。この神社は鍛冶町町民と鉄工関係者の信仰の場でしたが、一九四五年六月十八日の空襲で灰燼に帰しました。一九二二年の幡立、一九二〇年の狛犬の台座、一九二四年の鍛冶町氏子による柱ほかが残っています。神社は一九六〇年に再建されました。

14 鴨江寺 忠孝碑

鴨江寺も全焼しました。戦後植えられた黒松の幹はそ

11 五社公園 「陣忠碑」

この碑は在郷軍人会浜松市連合会の発起によって一九一九年に建設され、浜松尚義兵会によって運営されてきました。第一次世界戦争後には民衆の労働運動や植民地での独立運動が高まりますが、碑はそのような動きに対抗するように建設されました。戦後は「鳩の塔」と呼ぶようになりました。

この碑は天皇中心の帝国憲法の下で、兵士として天皇への忠誠を誓うことを表現したものです。碑はその志向を地域で支えた在郷軍人会という組織の存在を示すものです。

12 五社神社 「行幸記念碑」

一九三〇年、天皇裕仁は浜松に来て、飛行第七連隊、高射砲第一連隊、高等工業、日本楽器ほかを回り、練兵場で行進を見ました。この記念碑はそれを記念して、一九三二年に浜松市が建てたものです。碑には当時の市長により、飛行第七連隊などに天皇が「畏クモ」「行幸」したこと、その「聖恩ニ感涙」「十一萬市民等ク空前ノ光榮」などと記されています。そして「聖代ノ皇化ニ浴シ」

の大きさを増して今に至っています。寺の入り口には江戸後期の常夜燈が残っています。

戦後再建された観音堂の右側に、壁に隠れるように「忠孝は大日本の二柱」と記した碑があります。碑の建設は一九三五年の五月でした。両脇には父母に心を尽くして仕えるのが人の道という歌と「大君の御ためならばみ民われ火にも水にも入りては仕えむ」という天皇のために生命を捨てて服従していくことを示す歌があります。現在、この「大君」の歌は壁に隠されるように建てられています。

戦後、天皇に命を捧げるような強制は無くなりましたが、思想や信教の自由の実現には市民の不断の努力が必要です。

15 鹿谷 憲兵隊浜松分隊跡

鹿谷町には憲兵隊の分隊が置かれていました。姫街道を高町から三方原方面に上がっていくと、「公園前交番北」の標識があり、そのすぐ左側の民家の横に「陸軍用地」「第二号」と刻まれた標柱があります。この標柱はここがかつて陸軍用地であったことを示しています。

ここは浜松市街から三方原の陸軍航空部隊や高射砲部隊に向かう地点であり、憲兵が兵士・市民を監視する拠点でした。この鹿谷から広沢、幌塚にかけてたくさんの地下壕が掘られています。特に大きな壕が文芸館のところにありました。

16 木戸 破壊した蔵

馬込川の東方に戦火で焼け残った蔵があります。野口商店の横にある蔵の壁は空襲によって焼けたためもろくなっています。野口商店の庭には艦砲射撃によってひびが入り破損した庭石が残されています。

17 浜松城公園 浜松市戦災被爆者慰霊碑

公園グラウンド近くにあるこの碑は一九七九年三月に建てられました。碑の上には空襲によって苦しむ姿を示した人物像があります。空襲は空からの無差別大量殺戮攻撃でした。

碑には、浜松市の戦災死者数三五四九人、重軽傷者四八七〇人、全半壊家屋七五三六戸、全焼家屋四六三戸、投下爆弾三〇八一発、焼夷弾七九五三発、艦砲の砲弾

浜松に朝鮮人が大量に動員されたのは一九二五年の三方原での陸軍飛行場建設工事でした。

戦時期には基地の拡張工事、中島飛行機工場や日本無線工場など工場建設、地下工場建設工事への朝鮮人の動員がおこなわれました。奥天竜の鉱山や鈴木織機・日本通運などへの強制連行もおこなわれました。戦後、朝鮮人連盟が結成され、帰国・生存権擁護・民族教育などのための活動がおこなわれました。

日本の独立と朝鮮の分断の中で五〇年代後半から朝鮮への帰国運動が始まりました。この碑は浜松の朝鮮人史を示す貴重な碑です。北東アジアの平和と隣国との友好のための活動は今も求められています。

19 三組 菩提寺の破壊墓

三組町の菩提寺は空襲で全滅し、墓石は戦後に再配置されました。倉田倉太郎の墓碑は空襲で破損しています。倉太郎は一九二九年三月に包頭付近へと派兵されましたが、八月に戦病死しました。二二歳でした。墓は一九四〇年に建てられましたが、浜松への空襲によって破損しました。

二〇〇〇発、襲撃飛行機B二九・五五七機、小型機五〇〇機、全市七〇パーセントが被災とあります。

碑文には、とくに六月十八日の空襲によって市の中心部が一瞬にして紅蓮の炎に包まれ、「死の街」となつたと記されています。碑文の最後には「悲慘な戦争の絶滅を期し」、三千余名の戦災死者の冥福を祈り、「世界の恒久平和を祈念」と記されています。

戦争の絶滅、世界の恒久の平和、これらは過去の戦争で市民が学んだ事柄であり、その平和への想いを、市民は一九七九年にやつと刻むことができたのです。戦争を正当化する動きはいつの時代にもあります。その動きを封じ込める市民の活動が大切です。この戦争絶滅・恒久平和への想いを市民の生命と生活を守る盾としていくことが課題です。

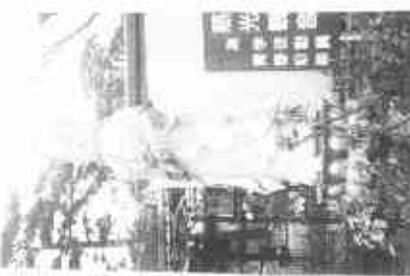
18 浜松城公園 浜松の朝日親善植樹碑

浜松城天守閣の脇(美術館方面)に、「朝日画国永久親善万歳 朝鮮民主主義人民共和国帰国記念植樹 在浜松朝鮮公民一回」と記された碑があります。この碑は一九五九年に建てられました。

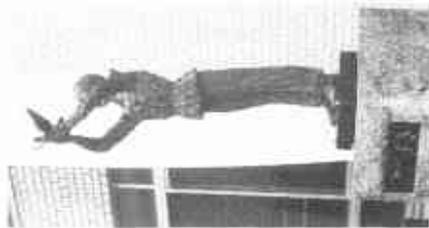
境内には鈴木政次の墓があります。かれは一九四五年八月十三日にハイラルの「安保山陣地」で戦死しました。ソ連軍との戦闘によるものです。敗戦の二日前のことです。



浜松空襲死亡者追悼碑の碑文



楊子 林野寺の地員学征追悼碑



芥田学園のやすらぎの像



浜松城近くの朝日友好碑



軍部の上野町(浜松市)の朝日友好碑



聖蹟下、市民の犠牲した真砂川



五枝公園 誠忠碑



平和観音

五 浜松市周辺での市民の死亡者数

『浜松市史三』(一九八〇年)に死亡者二九四七人分の町別の統計があります。浜松市被災被爆者慰霊碑では三五二九人とされているので、この数字には約六〇〇人が欠落していることとなります。しかし、各町での死者の状況を知るひとつの資料であり、死者の多い町の順に転記します。

町別にみると、海老塚二七六人、竜樺寺二五三人、鴨江二五〇人、寺島一五〇人、砂山一三二人、楊子一四一人、馬込一七人、東伊場一〇一人、元城一〇五人、旭八三人、尾張八七人、東田七五人、中島七五人、佐藤七四人、板屋六六人、中沢六三人、相生六二人、常盤六一人、ほかとなります。これらの町の合計は、全死亡者の約三分の二の死者数となります。これらの町はいずれも駅周辺です。

浜松駅周辺には軍需工場が集中していましたが、空爆は、米軍による無差別爆撃であり、一般市民の大量死をもたらしました。それは米軍による戦争犯罪でした。

ここで『浜松大空襲』『偲ぶ草』などの体験記から空襲

の状況を見ていきます。

一九四五年二月二十五日には浜松の基地が三派にわたる空襲を受けました。飛行機の下に退避した百人余の兵士が死傷したといえます。格納庫の屋根が吹き飛ばされ、当時特攻機用の爆弾懸吊具などを製作していた陸軍航空廠浜松分廠も炎上しました。この日、南小も爆撃され焼失しました。十六日には九七式重爆機が墜落され、金指駅西方に墜落しました。そこにはのちに碑が建てられました。

四月三〇日には連尺の十字路に百三十部隊の新兵百余人が集合していたところを直撃され、多くの兵士が手足を失い胴体を寸断されたものもありました。楊子の石川鉄工も爆撃され多くの死傷者を出しました。そこでは一八、二〇歳の女性が被爆しました。背骨が折れ、内臓が露出し虫の息で「殺して」と言っていたといえます。芳川小学校も爆撃され、兵士二人が即死し、羽目板には兵隊の血肉がばらばらになって張りついていました。芳川の改修工事に動員されていた人びとも死傷しました。東洋紡で女子寄宿舎が爆撃を受け、十七、八歳の一四人の少女が爆死しました。首のないもの、手足のないもの、腹部

から大腸の出るものなど悲惨な状況でした。

四月の空襲では軍需工場があつた竜禅寺や寺島が大きな被害を受けました。大きな木の枝には肢体や服地が引つかり、親たちが、手足がばらばらに飛び散つたわが子の体を捜し求めたりする姿が見られるなど、地獄そのままの風景であつたといひます。胴体だけになつた娘や消し炭のようになってしまつた父親の姿と対面した人びともいました。なかには寺の庭木に両手と膝から下を失つてぶら下がり、片方の眼球は頬まで垂れ下がつていたものもあつたといひます。

竜禅寺に住んでいた住民は、家の両隣の防空壕が直撃を受け、東隣の床屋の妻の足が大腿部から足にかけて地面から出、西隣では一五人が埋まり、遺体が掘り出され並べられたと記しています。

『楊子町誌』には、爆撃にあつて吹き飛ばされた体の一つ一つを救護所へ集めたこと、うめき声が夜まで聞こえたこと、自宅で伊藤愛吉、ふきゑ、久子、かねの夫・妻・子・母の四人が爆死したことなどが記されています。

この四月三〇日の空襲による死者は約一千人です。

五月十九日の空襲の際、遠州病院へは負傷者が殺到し

ました。腹部から腸が露出したもの、臀部をもぎ取られ直腸が切れて大便が出ているもの、顔面が半分吹き飛ばされたものなど、悲鳴・哀願・怒号が満ちていたといひます。

中島の防空壕で四人が死亡した状態をみれば、現場には一人の姿もなく、吹き飛ばされた壕の杭の間に誰ものかはわからない大腿部の筋肉が挟まつているだけだつたといひます。

この日の砂山町の壕への直撃では五人が粉々になり、土や肉の塊が砂にまみれていました。骨のない白髪を混じつた頭から背中にかけての皮膚と肉の塊や服地の切れ端から肉親を判別するという状況でした。人々は砂にまみれた肉の塊を分け合つて埋葬しました。

防空壕への直撃は人身を挽き肉のようにしてしまい、泥と混じつて人数さえわからなくしてしまうといひます。

五月十九日の空襲では、浜松商業の生徒が防空壕への直撃で死亡するなど、子どもたちも数多く死亡しました。

この日の死者数は四〇〇人を超えるとみられます。

六月十八日の空襲の様子をみると、尾張町では公衆防空壕で三〇余人が窒息・焼死しました。野口町では母親が

赤ん坊を抱え道端で焼死していました。

元目町角の防火用水には頭から半身を水に入れて母親が死亡し、近くには子ども四人が間隔を置いて倒れていました。道路上には死者が多数放置されていました。なかには、小学生が臍の部分から二つに裂かれたものもありました。

鳴江では壕の入り口近くに着弾して女性たちの下半身が埋まり、焼死しました。

新町西では硝子店の前の防火用水の中で女性が幼児を抱いて死んでいました。定備さで表彰を受けた新町のあつた防空壕では一家五人が蒸し焼き状態で死にました。

馬込川からは悶え苦しむ人々の異様な声が響いていました。

蒸し焼きになつて黄褐色にずりむけたもの、黒焦げで男女の識別すらできないもの、防火用水に首を突っ込み、体をへし折つて死んだもの、それらをトタン板に乗せ、集めて積み上げ、軍が不発弾の油脂を抜き取り、それを死体にかけて焼いたといひます。市内一面に死体を焼いた異臭が数日間漂つたのです。

六月十八日の空襲による死者数は約一、八〇〇人です。

市街地が一夜にして廃墟になりました。

六月二六日の空襲では板屋町に首がなく内臓がはみ出している女性の死体がありました。

七月一九日の艦砲射撃は軍事基地と軍需工場を狙つたものでした。目標は浜松工機部・浜松駅・日本楽器・東洋紡績・日本無線・西川鉄工・鈴木織機・遠州織機などでした。七〇分間で二一六〇発が撃ち込まれたといひます。

浜松駅の防空壕が直撃を受けました。この直撃での死者は五〇人を超えました。街には棺が並べられました。東海道線の列車も直撃を受けました。客車は「鉄棺」となつたといひます。鮮血と肉片が車内に飛び散りました。なかには顎や足を失つた人もいました。このときの艦砲射撃では約二〇〇人が死亡しています。

七月に入つての艦載機の襲撃の増加と艦砲射撃は米軍の上陸を予感させるものでした。

今はすっかりと変わった街並みから、爆焼死した三五〇〇余の生が存在したこと、それらの一人一人の死の状況や奪われた生の可能性を考えることもできます。また、その情景から、日本軍によるアジア各地での空爆で死を

十二 浜松の地下壕

浜松でのアジア太平洋戦争末期の軍地下壕構築の状況についてみてみましょう。浜松市には一九七四年からの「特殊地下壕」綴りがあります。この資料から、浜松市内の軍や町内会による「特殊地下壕」の分布状況をまとめることができます。

資料には約二百件の市内の特殊地下壕の事例があります。この資料は地域ごとに集約したものではありません。市民からの情報により埋め立てや人口の閉塞について記し、現地の地図が付されています。資料の分析にあたり、地域ごとに分類し、地下壕分布地図を作成してみました。

地下壕分布地図から、浜松市の壕のおおくが軍による構築物であると考えられます。

その理由は以下です。トーチカ一つを除き、壕のすべてが馬込川よりも東にあり、東海道線よりも北にあります。壕が集中している地域は都市中心部ではなく、市の北西方向の広沢・鹿谷・富塚・和合・神ヶ谷・住吉・幸・有玉・半田・大人見・伊左地などであり、これらの町は高台の浜

松基地の周辺にあります。浜松基地の南部に集中している壕に沿って東西に線を引いていくと防衛ラインが見えてきます。上島・鴨江・広沢などの小学校には陣地構築部隊が展開したという文書史料がありますが、その周辺に実際に壕があったことがわかります。基地近くの和合・富塚では丘陵や川ぞいに壕が点在し、疎開のみならず遊撃戦陣地の様相を呈しています。鹿谷・住吉には拠点とされていた壕がありました。

この資料から、アジア太平洋戦争末期の浜松基地防衛のための二〇〇余の軍関連地下壕の構築状況が明らかになりました。一九六〇年代までに破壊された壕も多いでしょう。浜松市北方の郡田にも壕が構築されています。細江や浜北の資料を追加すれば、基地北方に展開・疎開した部隊による陣地構築状況も明らかにできるでしょう。

これらの地下壕群は戦争史跡であり、文化財です。その構築目的・構築主体についての調査・記録が求められ、保存も検討されるべきものです。これらの軍地下壕群の分布をみれば、壕が軍事基地防衛と遊撃戦を想定して構築されたものであり、市民の安全を守るためにつくられたものではないことを知ることができます。

当時、軍の壕建設への朝鮮人兵士の動員が他の地域の調査では報告されています。伊左見や三ヶ日では朝鮮人農耕隊の存在が明らかになっています。一九二〇年代半ばの浜松基地建設においてすでに多くの朝鮮人が動員され、三〇年代の基地拡張にも動員されています。おそらく戦争末期には壕掘削に動員されたでしょう。

全国五千箇所という「特殊地下壕」は、侵略戦争末期の戦争遺跡です。浜松の軍事地下壕群はその存在をもって軍都浜松の歴史を語りかけています。それらは戦争の愚かさと平和を語るものとして、文化財としての調査・保存を求めているように思います。

十三 浜松での朝鮮人強制労働

強制進行前史 陸軍飛行第七連隊基地建設

日本による朝鮮半島の植民地支配にともない浜松へと多くの朝鮮人が居住するようになったのは一九二〇年代はじめのことです。

新聞記事から朝鮮人の就労現場をおつてみると、鴨江丸紡・菅原本工場・常盤鈴愛など女工（一九二二）や、鷲津工場（一九二二）、天竜川鉄橋下護岸工事（一九二三）、三方原での軍飛行場建設（一九二六）、新居土木工事（一九二八）、浜松上水道工事（一九三〇）、浜名湖埋立工事（一九三三）、馬込川改修工事（一九三五）、気賀湖北線工事（一九三六）などの工場や土木現場があります。

この中から三方原での軍飛行場建設（陸軍飛行第七連隊基地建設）についてみてみれば、一九二六年に大倉組の下で雇われた人びとは一千人をこえたといえます。二六年一〇月現在六〇〇人の土木労働者が基地建設に従事していましたが、そのうち二〇〇人が朝鮮人でした。工事が一段落すると朝鮮人は解雇されましたが、浜松市は救済事業の形で二〇〇人を道路修理事業に雇用したとい

います（『静岡新報』一九二六年一〇月二十九日、二七年二月二十七日付）。

浜松にはその後、陸軍飛行学校、三方原教導飛行団（毒ガス航空戦用の秘密部隊）、航測連隊基地などが次々に建設されていくこととなりますが、これらの基地建設にも多くの朝鮮人が動員されていきました。朝鮮人労働の遺蹟として基地の排水用に掘られた「長池」が残っています。

飛行場建設工事がすすめられていった一九二六年には朝鮮人団体の「相愛会静岡県本部」が浜松市砂山町で結成されています。相愛会は浜松市内に職業斡旋所、無料宿直所をつくつていきます（一九二九年三月完成）。相愛会は朝鮮人の労働争議や労働運動に対しては敵対し弾圧する側についています。

朝鮮人強制連行 鈴木織機と日通浜松支店

侵略戦争が拡大されるなかで、浜松の軍事基地は陸軍爆撃の拠点基地として強化され、浜松の基地は中国・東南アジアへの派兵拠点となり、派兵された部隊は重慶への無差別爆撃にむけての陸軍部隊の中核部隊となってい

設などの地下工場建設現場があります。

中国への全面戦争がはじまると鈴木織機の軍需工場化がすすみました。一部は兵器工場となり、高塚工場が新設され武器生産が強化されました。鈴木織機が生産した兵器には、各種榴弾、手榴弾、高射砲弾、迫撃砲弾、対戦車砲、機関砲、高射機関銃、照準器などがあります。鈴木織機は一九四二年に陸軍、四三年には海軍の管理工場となり、重要な軍需工場のひとつとされました。四五年に入ると二俣と金指へと地下を含めての疎開もはじまりました。

この鈴木織機へと一九四五年一月二十六日、平安北道寧辺郡から一一八人（内一人は五月に追加）が集団連行されてきました。連行された人々は旋盤、鍛工、大工、運搬、雑役などの仕事を強いられました。四月に四人が病気のために帰され、七月に四人が逃亡し、残ったのは一一〇人となり、日本の敗戦により解放をむかえた人々は九月二〇日に帰国しました。

朝鮮人と高塚工場の鍛工現場で、者になつた学生は、班長が荒い言葉でばかり口づけていた、日本人以上に食事に困っているような、なまじりく見えます。

きました。

浜松の工場の多くが軍需生産を行なうようになり、浜松市宮竹町には中島飛行機浜松製作所が建設されました。空襲が激しくなると、浜松の軍需工場は地下工場の建設を含めて分散疎開をおこなうようになりました。これらの疎開工事にも朝鮮人が動員されています。代表例としては中島飛行機浜松工場の掛川市原谷への地下工場移転があります。

日本は一九三九年から朝鮮人強制連行政策によつて朝鮮半島から日本へと労働力を動員していきました。浜松へと連行された朝鮮人については鈴木織機と日本通運浜松支店へと連行された人々の名簿（厚生省労働局が一九四六年に集約したもの）が残されています。また、中村組が請負つた磐田浜名用水幹線工事に「募集」されてきた朝鮮人の名簿も残されています。この中村組の工場の名簿には連行現場から逃亡してきた人も多数入っているとみられます。

一九四〇年代の主な強制労働の現場としては、鈴木織機、日通、中村組の他に、浜松基地拡張工事などの軍工事、天竜川上流の久根・峰之沢の鉱山、掛川地下工場建

日本通運は戦争下軍需輸送部門の中心となり、軍需輸送の特別部隊を編成していました。日通浜松支店へは一九四五年三月二三日に忠清南道礼山郡などから三七人が連行されてきました。

この中のひとり、「草木風世」は一九四五年六月一八日の浜松空襲の際に爆死しました。逃亡者は二人であり、連行された人々の約六〇%を占めています。五月、病気の二人が帰され、一人は日本軍へと徴兵されました。八・一五解放後の八月三〇日に、残っていた一人が帰国していきました。

浜松の 戦争史跡



竹内康人

浜松の戦争史跡



人権平和・浜松
ブックレット